



おおぞら

第206号

2022年1月1日発行

発行責任者 荻野和功

編集者 木部哲也

<http://www.seirei.or.jp/mikatahara/oozora/>

「施設利用者の内面理解」

所長 木部 哲也

数年前になります。閉症の僕が飛び跳ねる理由」という本を出した重度の自閉症患者である東田直樹さんについてのドキュメンタリー番組を観ました。自閉症（自閉スペクトラム症）とは、「コミュニケーション」と「社会性」の発達の障害と、物や行為への特異な執着の3つの主要症状を持つ発達障害とされています。言葉を介するやり取りが困難で、表出される行動や声は、健常者からみると奇異に感じられ、その意味を理解することは困難でした。東田さんは筆談や文字盤を使うことで言葉によるコミュニケーションが得意、作家として活動しています。

東田さんの著書を通じて自閉症の人の内面について、これまで謎とされてきたことの理解が進んだとして世界的にも注目されているそうです。例えば著書の中で、「手のひらを自分に向けてバイバイするのはな

ぜですか？」という質問に、「それは真似をすることが難しくなりました。とにかく自分の体の部分がよくわかっていないので自分の目で見て確かめられる部分を動かすことが最初の模倣なのです。」「僕たちは見かけではわからないかもしれませんが、自分の体を自分のものだと自覚したことがあります。また、「手や足の動きがぎこちないのはどうしてか？」という質問に、「僕にとっては、手も足もどこからついているのか、どうやったら自分の思い通り動くのか、まるで人魚の足のように実感のないものなのです。』と答えています。自閉症の子どもが、人の手を使って取ろうとするのも距離感が分かっていないためだということですね。

番組には、東田さんの著書を英語に翻訳し世界に知られるきっかけとなったアイルランド人の作家ミッチェル氏がでてきます。氏の10歳の息子も重度の自閉症で、彼の内面を何とか知りたいと考えていました。氏は、東田さんを家に招き、息子に会わせました。二人が意思疎通する場面を期待したのですが、期待通りにはなりません。しかし、別れ際に息子自ら東田さんに握手を求めるシーンが出てきます。両親も初めて見た、という「心が動く」瞬間が捉えられたシーンでも印象深く感じました。

おおぞらでは重症心身障害の中でも最も重い有意な言語理解がなく、自力で寝返りができない人たちのグループ（施設入所者では最多となり重症心身障害の中心をなしている方たち）について、その方たちの表出には意味があると捉え、階層や区分を作成して日常生活や保育活動を行っています。いろいろな評価法を組み入れることでより個別の発達特性を見つけることができ、それが適切な成長支援や生活支援につながることでできるというものです。

そうした活動の中で、「表出」が乏しいために、発達年齢が高くないと評価されてしまう人たちでも細かく見ていくと、「眼差しの変化」や「泣き出す場面」などに着目することで、例えば「やきもちをやく」とか、「興味があること」や「もう少し遊びたい」という気持ちを支援員に気づかせるなど、コミュニケーションをとろうとしている様子が見えてくるのが分かりました。以前このような経験を「気持ち（心）の動きが「まなざし」の変化に現れる事例（意思疎通の手段として読み取れる）」をまとめた研究」として発表し高く評価されました。「わずかな変化を見逃さず、こどもの発達に合った保育、絵本の語りかけなどに活用して知的面の成長を促していきたい」という動機が研究を支えました。

言葉による表出が難しい障害者の内面をどのように受け取るか。施設にとって重要な課題です。利用者一人一人について真に理解するように努め、満足感・達成感を感じられるような（いわば心が動くような）活動を提供し、施設での生活がよいものとなるように取り組んでいきたいと考えています。

あおばの

日常活動

植野 舞雪



Aさんは日常生活の中で流れてくる色々な音や様子に目を向けたり、耳を傾けたりしています。テレビから聞こえてくる音や、映像などにも視線を向けていて、テレビで流れているダンスの振りや真似て一人遊びをしていることもあります。他にも、他児が泣いていると手を顔に当てて泣いているようなジェスチャーを職員に見せています。それが職員に伝わると泣いていた他児の側に近づいて頭を撫でていることがありました。Aさんはジェスチャーをすることで、他者に対して、自分の気持ちを表す、それが伝わることや、伝わった

と感じられる面白さがある様でした。

活動での絵本の語りでは、出てくる擬音語や感嘆詞等の言葉からも、その状況を表わすような身振りや手振りを職員に見せる楽しさがありました。そこで言葉（の意味合い）と一緒に本の挿絵や動きの面白さを感じられる『ふしぎなナイフ』という絵本を読みました。本を開くと、Aさんは職員が捲っていく所をジッと見ていました。そして、3ページ目からは自分で捲って見ていました。「ナイフがほどこけると職員が語りかけていると、そのページの挿し絵を見ながらグルグルと腕を回していました。ページを捲るときに何枚か一緒に捲れそうになると、一枚ずつにして捲っていました。最後の語りかけのないページでは、それまではスムーズにページを捲っていた手を止めています。職員の語りが止まっていることに気付き、チラッと職員に視線を向けていました。職員が次のページを捲り、最後の「われた

と



というフレーズを読むと、読み終わってから本を閉じていました。1つのもの（ナイフ）が色々な形に変化していく挿絵や、「ふしぎなナイフが・・・」おれた」と間を開けながらゆっくりと読まれていくことにも面白さがあった様でした。

またAさんは見え方の変化する様な素材にも興味があります。ラップやカラーフィルムなど、向こう側が透き通る様なものや、カメラなどの1つの物を通して見るような見え方にも面白さを感じているようです。そこで活動で「色コマ」を見る活動を行いました。色コマは、透明や色がついていても透けるようなカードがあります。それを重ね、さらに回すことで、色や模様の変化する素材です。2種類の色つきの

カードと模様のあるカードを重ねたコマが回ると、Aさんはその様子をよく見ていました。Aさんが自分で「色コマ」のカードを持つ

ことがあります。白色の渦巻きのカードを持つとそれをジッと見ていました。そして、そのカードを手元で回して見ていました。カードを回したことで、模様が変わることに気付いたようでした。その後もジッとカードに顔を近づけながら見ていました。コマに乗せて回した時とは異なる見え方に気付き、面白さを感じていたようでした。

生活支援課では、一年に一回職員研修を行っています。今回は、今年度企画した生活支援課中堅研修の内容を報告します。



今年度の生活支援課中堅研修のテーマは「利用者の生活の質向上のために、一般的な生活活動を考え、利用者理解をもとに利用者の生活を設計する」としました。



一般的な生活活動とは、達成感・満足感のある生きがい活動やADL、医療的ケア、リハビリ以外の利用者が過ごすすべての時間のことを指しています。毎日、利用者が何を見て、聞いて、何に興味関心があるのか、ということ職員は理解していかねければなりません。利用者理解をもとに、どのようなものが見えるか、どのくらい聞こえるか、どのくらい聞こえるか、どのくらい聞こえるかなどを考え、利用者が過ごす空間などをそれぞれ設計していきます。

研修当日は3人ほどのグループで討議をしながら進めていきました。グループで利用者の一般的な生活活動のエピソードと理解を共有しました。他者の意見を聞いて自分の頭で考える、自



分の意見を伝えて質問に答える、ということを繰り返しました。利用者の素敵なエピソードに話がふくらむこともありました。始めは緊張気味だった職員の表情も徐々に柔らかくなってきました。意見がまとまらないときは、他職員にフォローしてもらいながら伝えられるようになっていました。グループ討議は、他者の意見を聞いて、新しい考えが浮かぶような貴重な時間となりました。

研修を通し、職員それぞれが利用者の一般的生活活動を意識して、利用者の生活がよりよいものとなること、また、研修で得た「学び」を日々の利用者支援に活かしていければよいと考えています。

フェスタ代替イベントを開催しました

今年もフェスタおおぞらは中止となりましたが、それにかわるイベントを各号館にて開催しました。

1号館、2号館で音楽会、3号館でペープサート(紙人形劇)を行いました。

12月には家康さんと直虎ちゃんが登場し、職員の演奏にあわせて歌いました。

それぞれ楽しい時間を過ごしました♪



リレーエッセイ

「健康的な生活」

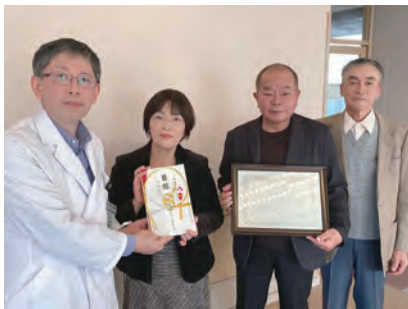
あおば 村上 龍

コロナ禍になる前は、体を動かすことは少なく、好きな物を好きなだけ食べ、毎日煙草も吸っていました。健康とはほど遠い生活で、少し体を動かしただけでも疲れてしまったり、よく風邪をひいたりマイナスイオンばかりの状態でした。コロナ禍になり仕事以外で自宅から出る事が減ってしまい、今まで以上に体を動かす機会が減ってしまいました。このままではいけないと感じ、息子達と一緒に室内や庭でできる運動を始め、禁煙もしました。最初の内は息子達も楽しんで取り組んでいたのです



家族の会より寄贈いただきました

家族の会より多くの品を寄贈いただき、この度目録贈呈式を行いました。大切に使用させていただきます。ありがとうございました。



家族の会代表の皆さんから木部所長へ目録が手渡されました。



が、徐々に飽きてきたようで、最終的には私1人で運動をするようになっていました。1人でも集中して続けていくことで、体を動かすことに楽しさや充実感を感じるようになり、気が付いたときには栄養や睡眠などにも気をつけるようになっていきました。その成果

もあってか、この1年半ほど体調を崩すことなく健康的に過ごせています。今後、運動することに飽きてきた元の生活に戻るかもしれないですが、楽しめる範囲でコツコツ続けていければと思っています。次回のリレーエッセイもお楽しみに！

炊き出し訓練を行いました

11月25日（木）に非常炊き出し訓練を実施しました。

厨房スタッフを中心に参加し、防災倉庫にて炊き出しに必要な器具・備品の準備と操作確認を行いました。

非常時献立確認、アルファ米の作成方法確認後、実際に災害時の調理方法を学ぶために備蓄倉庫のガスバーナーを使用して火を付ける操作手順や非常用のご飯や味噌汁を作り、防災に対する知識を深めました。



異動職員紹介

3号館 田中彩菜

9月より、聖隷三方原病院から移動になりました田中彩菜です。個別性を考えた看護ができるよう、利用者一人一人に合わせた関わりを大切にしたいと思います。よろしくお願ひします。

苦情解決委員会

2021年7月～9月

期間中公表する苦情はありませんでした。

	9月	10月
ショートステイ利用者数 (延べ利用日数)	0人 (0日)	25人 (90日)
放課後デイ利用者数 (延べ利用日数)	0人 (0日)	7人 (35日)
実習者数 (グループ数)	0人 (0グループ)	2人 (1グループ)